

邪馬台国論争

平成10年1月7日～1月23日

“邪馬台国” — 中国の書物「魏志倭人伝」に記された日本の古代の国をめぐり、江戸時代以降、様々な論争が繰りひろげられてきました。当初、一部学界の関心事であった邪馬台国論争は、現在では多くの人々の注目を集めるようになり、新たな発見があるたびに新聞紙上を大きくにぎわしています。しかしながら、今なお、数々の点で解決をみていません。果たして邪馬台国はどこにあり、その女王、卑弥呼はどのような人物であったのでしょうか。

今回の展示では邪馬台国の研究史を概観しつつ、論争についての資料を中心に紹介します。

展示資料一覧

<>内は当館請求記号

【魏志倭人伝の世界】

1. 「三國志」 三

北京 中華書局 新華書店北京発行所(発行) 1973 <GE273-16(カード目録)>

一般には「魏志倭人伝」と称せられるが、正確には『三国志』「魏書」東夷伝倭人条といい、中国・西晋の陳寿(233～297)が著した歴史書である。倭人条は帯方郡(現在のソウル付近)から倭にいたる道程や邪馬台国をはじめとする倭の国々のこと、さらに倭人の政治・地理・風俗・物産、倭と魏との通交記事などを記し、当時の日本の状況を知るための貴重な資料となっている。

2. 「全訳 魏志倭人伝」

三木太郎

<Z8-442>

歴史読本 第29巻第14号

新人物往来社 1984

3. 「邪馬台国ハンドブック」

安本美典

<GB163-266>

東京 講談社 1987

代表的な邪馬台国の比定地。

【邪馬台国論争】

<争点> 邪馬台国の所在論

邪馬台国の候補地は六十以上あり、遠くは海外に求める説まである。しかし、大きくは江戸時代の新井白石・本居宣長以来、(畿内)大和説と九州説に分かれ、現在に至っている。

4. 「古史通或問」

新井白石

<HA41-6>

新井白石全集 第3巻

東京 国書刊行会 1977

初めて魏志倭人伝に対する合理的な研究を開始した。『古史通或問』は1718年の書。これでは大和説をとったと考えられる。そして魏志倭人伝の国名を古典にある地名にあてていき(例：対馬国→対馬国、一支国→壹岐国、末盧国→肥前国松浦郡、伊都国→筑前国怡土郡、奴国→筑前国那珂郡)これら比定は今日まで受け継がれている。しかし、白石は1722年頃に著した『外国之事調書』では九州説(筑後国山門郡)をとるようになった。

5. 「馭戎慨言」

本居宣長

<121.25-M893m>

本居宣長全集 第8巻

東京 筑摩書房 1972

魏志倭人伝の里程日程記事を細かく検討し、新たな角度から九州説を主張した。卑弥呼については「かの国へ使をつかはしたるよししるせるは、皆まことの皇朝すめらみかどにはあらず。筑紫の南のかたにていきほひある熊襲くまそなどのたぐひなりし」と述べている。この宣長の見解は“偽僭説”ぎせんとよばれ、明治にはいつてからも受け継がれていった。

6. 「卑弥呼考」

内藤虎次郎

<YA5-12>

芸文 1年4号

京都文学会 1910

魏志倭人伝に書かれた諸国の地名の比定、官名・人名等の詳しい考証を行い、大和説を展開。さまざまな中国の古書を比較検討し、方角について誤りが多いことを指摘、「不弥国」以下の「南」

を「東」の誤りとした。卑弥呼については、男弟を景行天皇にあて、倭姫命(やまとひめのみこと)を卑弥呼と考えた。

7. 「倭女王卑弥呼考」

白鳥庫吉

<GE41-4>

白鳥庫吉全集 第1巻

東京 岩波書店 1969

九州説を唱えた。「帯方郡」から「不弥国」までの里数の合計1万7百余里を「帯方郡」から「邪馬台国」までの里数1万2千里から引くと1千3百余里になる。この数字をもとに邪馬台国は九州の中に求めるのが自然と結論づけた。また、陸行一月を一日の誤写であるとした。

8. 「東洋史上より観たる日本上古史研究」

橋本増吉

<610-155>

東京 大岡山書店 1932

内藤・白鳥両説と同年、「耶馬台国及び卑弥呼に就て」を発表し、内藤説を全面的に批判。卑弥呼の時代を崇神朝と考え、この時期はまだ筑紫の地が朝廷の支配下になかったという。そうすると、北九州の奴国や伊都国を支配した邪馬台国は、大和ではなく九州だと考えるべきだとする。

9. 「狗奴国考」

山田孝雄

<雑54-45>

世界 83号

京華日報社 1910

魏使は伊都国にとどまり、伊都国以降の記述は伝聞にすぎないと考え、方位については南を東の誤りとし、山陰海岸沿いの日本海航路を推定。投馬国は但馬、邪馬台国は今の大和国であるとしている。また、邪馬台国と敵対していた狗奴国を毛野国とした。

<争点> 卑弥呼について

「鬼道に事え、能く衆を惑わ」したとされる卑弥呼は邪馬台国の研究上、謎につつまれている。『日本書紀』以来、卑弥呼は神功皇后とみられていたが、邪馬台国論争が活発になる江戸時代からはいろいろな人物に比定されるようになった。特に戦前の大和説では卑弥呼を大和朝廷の誰かと結びつけることがなされており、その点でも意見が分かれていた。その後の論争では卑弥呼を具体的に誰かを比定するより、卑弥呼の王権をどうとらえるかなど焦点が変わってきた。

10. 「漢籍に見えたる倭人記事の解釈」

喜田貞吉

<YA5-11>

歴史地理 30巻3号

日本歴史地理学会 1917

倭人を日本民族論の観点から論じ、卑弥呼は筑後国山門郡にいた大和朝廷傘下の九州の王であったとみた。卑弥呼は九州の国々を代表して魏と通交したが、「魏志倭人伝」の編者は卑弥呼の国と大和朝廷を混同して、邪馬台国をはるか遠くにもってきたと述べた。

11. 「卑弥呼即ち倭迹迹日百襲姫命」

笠井新也

<YA5-10>

考古学雑誌 14巻7号

日本考古学会 1924

卑弥呼を倭迹迹日百襲姫命(やまとととひももそひめのみこと)とし、箸墓古墳(奈良県桜井市)を卑弥呼の墓と考える説を発表した。

<争点>銅鏡百枚

魏志倭人伝に「汝の好物を賜う」と記されているように、倭の国では鏡をこよなく愛していた。魏は卑弥呼の遣使に「銅鏡百枚」を授けたとされているが、この「銅鏡百枚」をめぐる、大正時代以降、考古学者を中心として論争的になっている。中でも卑弥呼が朝貢した年「景初三年」の銘を持つ三角縁神獸鏡がその鏡とする説が出された。

12. 「考古学上より観たる邪馬台国」

高橋健自

<YA5-10>

考古学雑誌 12巻5号

日本考古学会 1922

卑弥呼の時代が古墳時代であるという前提に立ち、畿内に成立した古墳が東西に伝播すること、前漢鏡が北九州に後漢三国六朝時代の鏡及びその模造鏡の中心が近畿にあることを主張し「文化的に見て邪馬台国が大和たるべきを推断」した。考古学者による邪馬台国問題への斬り込みであった。

13. 「古鏡の研究」

富岡謙蔵

<GE73-22>

京都 臨川書店 1974

三角縁神獸鏡を魏の鏡と考え、魏志倭人伝の中の「銅鏡百枚」に符号させた。

14. 「鑑鏡の研究」

梅原末治

<756.5-U523k>

東京 大岡山書店 1925

鏡の資料集成を徹底し、一部に同範鏡の存在を認め、鏡の伝世や銘文解釈を行った。

【戦後の邪馬台国論争】

15. 「邪馬台国の位置について」

津田左右吉

<Z220.05-O1>

オリエンタリカ 1

1948

大正2年(1913)、『神代史の新しい研究』を発表し、古事記や日本書紀の記事の多くは、後世の朝廷で創作されたものであることを指摘。この説に従えば、卑弥呼に関わる事件や人物を記紀の記述と結びつけてきた大和説はよりどころを失う。そして津田は、邪馬台国の行程記事には、帯方郡からの使節が距離を誇張した点があると考え、邪馬台国が奴国や不弥国の南方にあったということは、疑いないと思うので、地名から考えると筑後国の山門郡とするのが穏当であろうとした。

16. 「新稿日本古代文化」

和辻哲郎

<210.3-W99n>

東京 岩波書店 1951

「銅鐸文化圏」「銅剣・銅矛文化圏」を大きく世に広め、大和朝廷は邪馬台国勢力が東遷してうちたてたものとする「邪馬台国東遷説」を提唱した。

<争点>古代国家論

邪馬台国がどのような形態の国家であったかという論争は邪馬台国の歴史的な位置を明らかにした。つまり、大和説をとると3世紀の中ごろにはすでに畿内を中心として広く西日本におよぶ勢力があったことを意味し、九州説をとるとまだその状況にまでは至っていないと考えられる。

17. 「埋もれた金印」

藤間生大

<210.3-To459u>

東京 岩波書店 1954

2. 3世紀の国家構造の性格を追及し、東アジアの情勢とも関連させて、倭国の社会と政治などを考察した。邪馬台国の所在地については政治的社会的な発育度からみて、当然北九州だろうとしている。そして、卑弥呼は連合国家に共立された女王と考えた。

18. 「日本古代国家成立史の研究」

上田正昭

<210.3-U189n>

東京 青木書店 1959

魏志倭人伝の史料考証をとおして九州説・大和説を再検討し、邪馬台国の王権はすでに3世紀の

中葉には北九州を含む統属国の上にたつもので、基本的には、共同体のアジア的形態を基礎とする初期専制君主の権力であるとした。

19. 「国家の発生」

直木孝次郎

<210.1-I922-I>

岩波講座日本歴史 第1

東京 岩波書店 1962

邪馬台国と大和政権との質的な相違を指摘し、両者を別系統の政権と考えている。

20. 「神話から歴史へ」

井上光貞

<210.1-N687>

日本の歴史 第1

東京 中央公論社 1965

邪馬台国はかなりの領域を治めてはいてもずば抜けた勢力をもつ専制国家ではない。卑弥呼は多くの小国の支持なしには王位にはつげなかった。それゆえ、邪馬台国の時代は、古代専制国家成立以前の英雄時代であったとする。

21. 「日本の古代国家」

石母田正

<GB161-29>

東京 岩波書店 1971

卑弥呼は国内に対する原始的な巫女の顔と、中国に対する国際情勢を読む開明的君主という二つの顔をもっていたという。それゆえ、魏が帯方郡を押さえたことに対応する形で、邪馬台国の三十国に対する支配が確立したという。

【邪馬台国研究の新視点】

22. 「邪馬台国」

榎一雄

<210.3-E24y>

東京 至文堂 1960

魏志倭人伝の筆法の違い(伊都国に着くまでは方位・距離・国名、伊都国以後は方位・国名・距離となっている)から伊都国を起点に放射線状に読むという解釈をした。これは“放射線説”と呼ばれ、九州説の新しい解釈として注目を浴びた。

23. 「魏志倭人伝に描かれた日本の地理像—地図学史的考察」

室賀信夫

<Z9-171>

神道学 第10号

神道学会 1956

1402年朝鮮で作られた地図「混一疆理歴代国都之図」をもとに、当時の中国人は日本列島を南北にのびていたと考えていたために東に行くのを南へ行くこととしたのであろうと論じた。

24. 「古墳時代の研究」

小林行雄

<210.02-Ko471k3>

東京 青木書店 1961

古墳の総合的研究を基盤に伝世鏡論や同范鏡(同じ鑄型から作られた同一文様の鏡)論を展開し、邪馬台国畿内説の理論的支柱を形成した。小林の三角縁神獣鏡舶載品説は多くの研究者に受け継がれる。

25. 「日本の古代文化—古墳文化の成立と発展の諸問題」

森浩一

<209.3-Ko479-I>

古代史講座 第3

東京 学生社 1962

三角縁神獣鏡が中国で全く出土していない事実を基礎に国産鏡説を最初に唱えた。

26. 「三角縁神獣鏡」

王仲殊

<GB111-E153>

尾形勇、杉本憲司編訳

東京 新潮社 1992

中国の考古学者である王は、三角縁神獣鏡を東渡した呉の工匠により日本で製作されたものであると発表し、日本の考古学者を驚かせた。

【広がる邪馬台国への関心】

27. 「古代史疑」

松本清張

<210.3-M335k>

東京 中央公論社 1968

著名な作家による邪馬台国論。邪馬台国論争を一般の人々にひろめた。

28. 「まぼろしの邪馬台国」

宮崎康平

<210.3-M665m>

東京 講談社 1967

邪馬台国を探し求める著者の姿が多くの読者を魅了し、ベストセラーになった。

29. 「鬼道の女王卑弥呼」 上・下

黒岩重吾

<KH297-G287>

東京 文芸春秋 1996

30. 「吉野ケ里」 本文編

佐賀 佐賀県教育委員会 1994

<GB121-E3883>

吉野ケ里遺跡の発見は邪馬台国との関連性から空前の古代史ブームを巻き起こした。

31. 「卑弥呼の世界」

和泉 大阪府立弥生文化博物館 1991

<GB163-E136>

魏志倭人伝に登場する卑弥呼の「宮室」の想像模型などを展示する大阪府立弥生文化博物館は邪馬台国に関する特別展を数多く開催している。

32. 「鏡の時代 銅鏡百枚」

河南町(大阪府) 大阪府立近つ飛鳥博物館 1995

<GB117-G5>

33. 「倭国 邪馬台国と大和王権」

東京 毎日新聞社 1993

<GB115-E43>

邪馬台国関係の展示会の中には全国規模で開催されるものがあり、邪馬台国への関心の高さが伺える。

◎請求記号が YA ではじまる資料は、マイクロ資料でのご利用になりますので、展示期間中
でもご利用になれます。

国立国会図書館 03-3581-2331(代)

ホームページアドレス <http://www.ndl.go.jp>

■国立国会図書館 ■□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□■03(3581)2331 ■